

# 研究方法について

研究実践部・支援部

## 1 研究の目的

### 要素

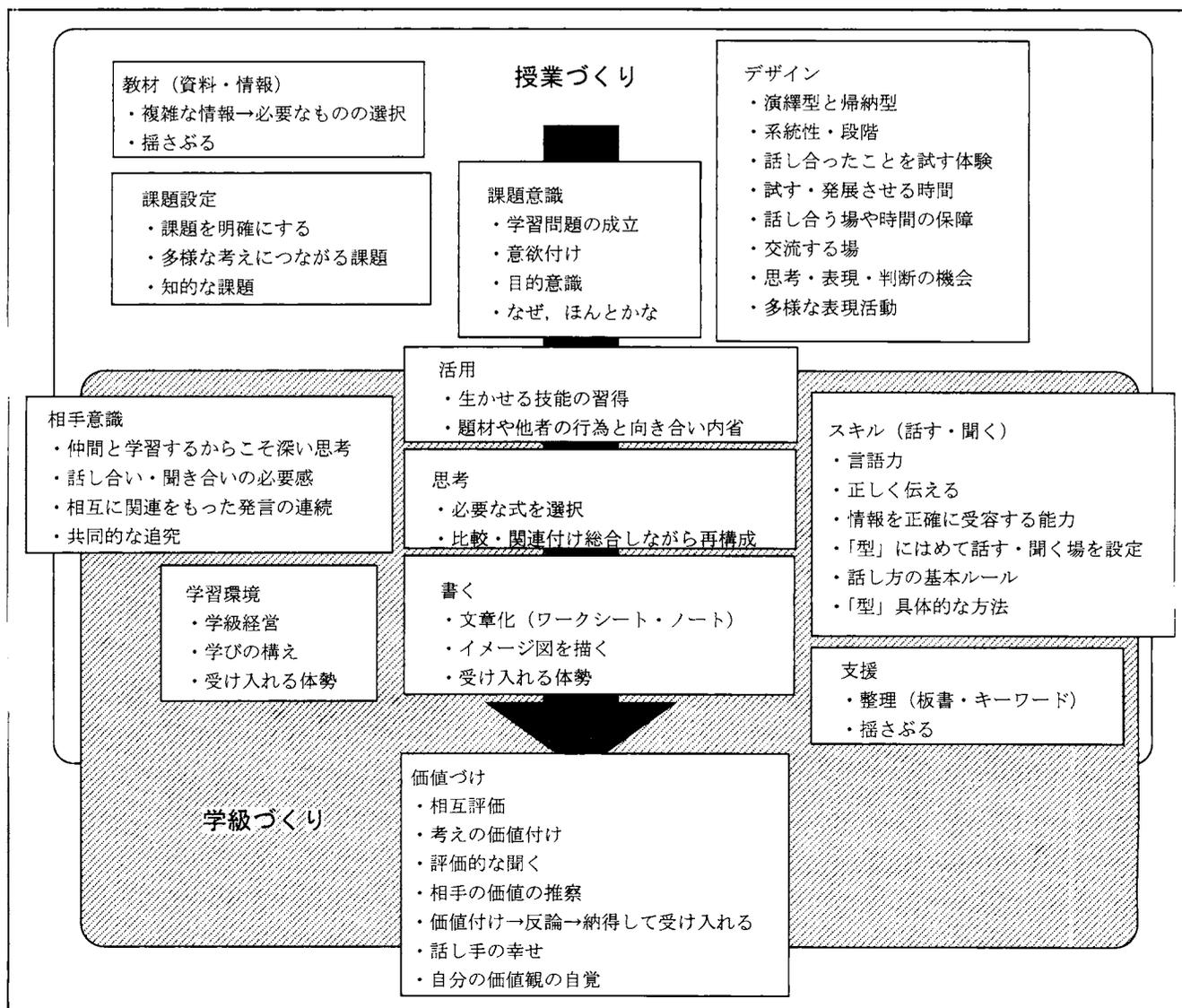
\*1 要素とは、実践から思考力・判断力・表現力をはぐくむ話し合い・聞き合いの活動の条件となり得るものである。

### 条件

話し合い・聞き合いの活動の中で思考力・判断力・表現力がはぐくまれるためには、活動の中に思考力・判断力・表現力をはぐくむための欠かせないものがあると考え。普段の学習活動を振り返ると、思考力・判断力・表現力をはぐくむと思われる要素\*1（資料1）が存在する。この学習に関する様々な要素の中から、話し合い・聞き合いの活動において思考力・判断力・表現力をはぐくむために欠かせないものを条件として考え、授業実践を通して、その条件を明らかにしていかななくてはならない。また、具体的な学習活動を通して、子どもの姿から条件として成立するかを検証していくことが重要であり、数多くの実践を行う必要がある。そのため、日々の実践の中で検証を繰り返していくことが求められる。

### 1年次研究の目的

以上のことから、1年次研究の目的は、話し合い・聞き合いの活動が「であう・つながる・うまれるコミュニケーション」となる条件を、日常的な実践の積み重ねの中で明らかにしていくことである。



資料1 「思考力・判断力・表現力をはぐくむ話す・聞く活動」に関する要素

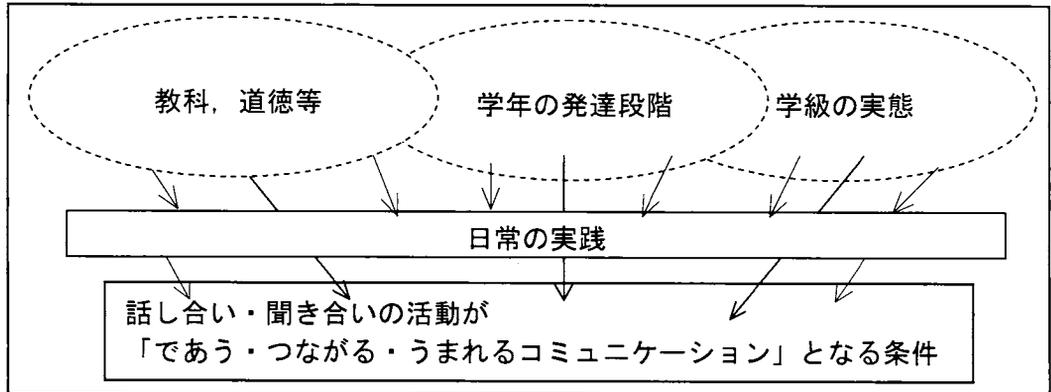
## 2 研究の方法

### (1) 日常的な実践の研究

様々なアプローチ

要素は、教科の特性を生かせるもの、発達段階に関係するもの、学習集団づくりによるものなど、多様である。

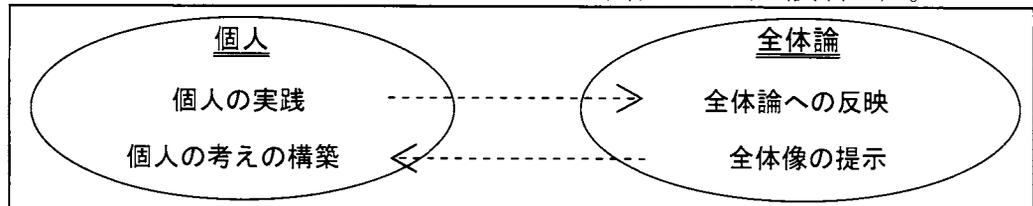
できるだけ多くの実践を集め、今後の研究に生かしていくという点から、教科、道徳等によるアプローチだけでなく、学年、学級の実態に応じて、各人が実践を積み重ねていけるスタイルがより多様な実践を集めるために効果的である。試行錯誤しながら日常的に実践に取り組み、教科や学年など、様々な角度からアプローチし（資料2）、多様な実践を積み上げることが、1年次の研究にとって大切である。



資料2 様々な角度からのアプローチの例

そこで、まず研究主題を受け、各人が実践テーマ<sup>\*2</sup>を立てる。そして、上述のアプローチを踏まえた上で、思考力・判断力・表現力をはぐくむ条件となり得るものを考え、設定する。設定された条件は、日常の教育活動の中で実践を繰り返して、検証されていく。しかし、各人が種々の条件を設定し、取り組むため、その実践の妥当性を確かめる場が必要となる。そこで、日常的な実践から見出されてきた条件を試行・提案する場として「研究授業」「実践交流」を設定し、実践を積み上げることとする。

日常の実践の充実には、新しい気付きや疑問を数多くもたらす。それらの気付きや疑問をその都度共有し、理論に反映させていく。そのことにより、常に全体論を見つめ直し、本論を確かなものとして構築していく（資料3）。



資料3 個人の実践と全体論との関係

### (2) 研究授業について

研究授業の目的

1年次における研究授業の目的は、日常の実践の中で見出されてきた条件について授業を通して提案し、具体の姿から条件の検証・模索を協議していくことである。先にも述べたように、より多様な実践を集めるため、各人が実践を積み重ねていくことが今年の研究のスタイルである。つまり、各人が日々の授業の中で実践し検証していくこととなるため、互いの実践が見えにくい面がある。各人の実践を全体に環流し、学校研究を積み上げていくためにも研究授業の役割が重要である。そこで、以下、実施計画から研究授業、また、それに関連した取り組みについて述べる。

互いの実践を全体に環流

低中高学年部会が中心  
全体が参観できる体制

共通理解と視点

- ・ 授業者の「とらえと条件設定
- ・ 授業で目指す姿
- ・ 授業での条件と手だて

- ・ 子どもの姿から見取る
- ・ 言動や様子の記録（ビデオ）
- ・ 学習形態などに合わせた記録

授業の分析・協議  
実践に生かす場

- ・ 条件設定の適切さと手だての有効性
- ・ 見出された条件の交流

実践の成果の共有

「実践だより」

### ① 研究授業の実施計画

低中高学年部会を中心に授業を公開する。多くの実践について参観できるように研究授業は、任意ではあるが常に全体が参加できる体制を整えるようにする。そのため、一日に行われる研究授業は、原則一つとし、一週間に低中高学年の授業が重ならないように実施計画を立て行う。

### ② 事前研究会

研究授業をするに当たっては、授業者及び参観者で以下の3点について共通理解を図り、授業を見取る視点を明確にする。

- ・ 授業者の「である・つながる・うまれるコミュニケーション」についてのとらえと条件の設定
- ・ 授業で目指す「である・つながる・うまれるコミュニケーション」の姿
- ・ 研究授業における条件と手だて

### ③ 研究授業

事前研で共通理解されたことをもとに、下記のように授業を行う。

- ・ 条件として成り得るものであったか、そして手だてが適切であったかを子どもの授業の姿から見取る。
- ・ 子どもの姿から検証を行うため、子どもの言動や様子などを記録する。また、後に再検証できるようにビデオによる記録も行う。
- ・ ペア及びグループなど様々な学習形態や授業者の意図に合わせて、抽出見や抽出グループを設定し、記録（ビデオを含む）を行う。

### ④ 事後研究会

研究授業での記録や見取りをもとに、以下の4点について分析、及び協議し、今後の実践に生かす場とする。

- ・ 子どもの姿から授業者が意図する「である・つながる・うまれるコミュニケーション」の姿が見られたか。
- ・ 授業における条件設定の適切さ、及び手だての有効性が見られたか。
- ・ 授業者の設定した条件以外で、授業から見出された条件について意見交流する。
- ・ 事後研後に、参観者が研究授業や事後研から今後の実践に向けて考えた内容を記し、授業者に渡す。授業者は、その内容を今後の実践に生かす。

### ⑤ その他の取り組み

任意であるが、全体が参観できるような体制づくりを行ったが、全ての研究授業を参観することは事実上難しい。そのため、互いの実践の交流を盛んにし、実践の成果が共有できるようにするため、次の2点について取り組みを行った。

- ・ 「実践だより」を定期的に発行
- ・ 研究授業のビデオライブラリー

「実践だより」とは、各人の研究授業における実践、及び事後研の内容を伝える学内配布用のものである（資料4）。一週間に行われた研究授業について、事後研で話し合われたことなどを中心に



資料4 実践だより

まとめ、複数の実践から見える共通項や課題などを掲載し、互いの実践の共有化の一端となるようにする。

研究授業のビデオライブラリー

「研究授業のビデオライブラリー」については、先に述べた「実践だより」や研究授業後の話から実際の授業の様子が見られるようにするために、全ての研究授業をDVDにし、ビデオライブラリー（写真1）として誰もが自由に研究授業を見ることができるよう環境を整える。



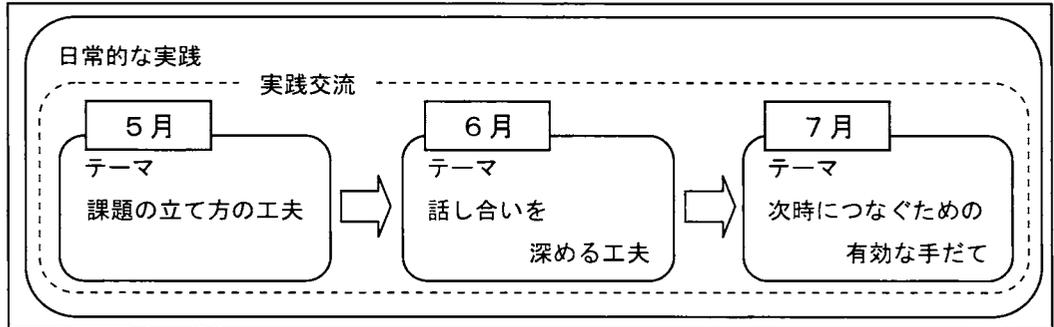
写真1 研究授業のビデオライブラリー

(3) 実践交流について

実践交流の目的

実践交流とは、日々の授業を互いに見合うものである。主な目的は、「一人一人の授業力向上を図る」ことである。今年度は研究にかかわり、日常的な授業実践の中で、他者からの意見を求めたい実践を試す場として活用をしている。実践交流は月一回行い、月ごとのテーマに合わせた授業実践を行う（資料5）。

実践を試す場



資料5 実践交流の月ごとのテーマ

授業実践計画

授業の参観者は基本的に同学年とするが、他学年からも参観できるように、授業実践計画を用紙（資料6）に書いたものをカレンダーの予定日に貼り、他学年にも把握できるようにする。授業を公開する箇所についても授業者の思いに合わせ、「授業全て」や「前半の15分間」など設定できるようにする。研究授業とは違い、実践を試す場ととらえ、指導案等は準備せずに行うものとする。実践交流した後は、内容の意見交流を学年で適宜に行う。授業者に参観者の声が届くように、用紙に記入し、授業会場に設置されたポストに入れるようにする。

実践授業計画	
日時	6月1日(火) 4限: 体育館
氏名	吉田 正樹
教科	体育
クラス	5年1組
内容	体づくり運動 ※授業の前半に参観を 2枚のマットをいかにだに見立てて、体育館の端から端までマットから落ちずに移動する。1グループの人数を6人とし、落ちなければマットの移動の仕方は自由とする。 この活動を体感することから始め、その後、グループ同士を対比させながら、早く移動する方法(作戦)を考える学習活動を行う。

資料6 授業実践計画の用紙

授業者の思いに合わせた公開

ポストの設置

実践の内容をまとめてレポート

授業者は、参観者の見取りを参考にして、実践の意図と考察をレポートにまとめ、今後の実践に生かすようにする。また、このレポートは集約され、教育実習の指導の資料として蓄積されていく（資料7）。

日常実践	
教師・専任名	園部・おはなしをたのしもう
授業者	松井 由紀
テーマ	「課題の立て方の工夫」
<p>&lt;指導の意図と考察&gt;</p> <p>① 本時の課題を立てるときに、子どもの意図の裏に添うようにする。本時では、題名読みをするときに話すことを恥ずかしがる子どももいた。そこからきづいたときは「そう」という声で促すようにした。</p> <p>② 本時の課題を全員につかませるため、子どもに課題をノートに書かせ、書いた子に読み上げさせるようにした。</p> <p>③ 次時からの課題が生まれるように、不思議に思うことはないか、もっと話してみたいことはないか発問した。取っている意見をまとめさせ、次時からの課題とした。課題は、話し合う前にノートさせた。</p> <p>○これまでと比べ、終末に、課題を達成できたか確認に乗り遅ることができた子どもが多かった。本時の課題が子どもの意図の裏に添ったものになったからかもしれない。</p> <p>▲全員が課題に向かって集中できたわけではない。課題の立て方をもっと工夫するとともに、集中できたという充足感をもつようにさせたい。</p>	

資料7 実践交流をまとめたレポート